
RPG W(・　・)RLD ぼくのステキなＤＡ 天使サマ
貝塚ゴロー

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPG W(・・)RLD ぼくのステキなDA 天使サマ

【ZINEコード】

Z2838Z

【作者名】

貝塚、ローラー

【あらすじ】

「突然だが俺は堕天使が好きだ」

大企業のボンボンが行く、良い子のための堕天使（笑）による異世界譚。

「えっ、この世界つてサザエさん観れないの？ マジで！？」

ノリと根性、ときどき真剣でお送りするハートフルでサスペンス、そもそもってコメディ的なRPG、始まります。この小説はRPGW(・・)RLDの一次小説です。そしてこれはどこまでい

つても作者の皿口満足の産物である」と評した。

こだわりを持つて、人は初めて強くなれる（前書き）

ハイ、皆さん初めまして。貝塚ゴローです。

この小説は基本的にオリ主視点での話のため、原作主人公達の行動、心情等を詳しく知りたい場合は原作を読むことをお勧めします。

また、「お前前回と今回で話矛盾してんじゃねーか！ クソガツ！」
「ハッ、ここ字イ違えから、俺が教えてやんよつ！」等ありました
らコメントフォームにて放出してください。

こだわりを持つて、人は初めて強くなれる

俺こと桐条瑠依きりじょうるいは万物に対してもこだわりと言つものを持ち合わせている。例えば、そう、ボーリングの球だつたり、カラオケの機種だつたりもそうだ。

歴史上、何か功績を残している人物というものは総じて譲れない何かを持ち合わせているものだ。

こだわりを持つ者は天下を取る、とあの豊臣秀吉も言つたり言つてなかつたり。

とにかく、俺はこだわりを大事にする男だ。

そして、それはゲームに対しても同じだ。まず、ゲームを始める前に俺はそのデータを自分に都合の良いように改鑄する。

と言つても原型はあるべく保つたまま気に入らない部分だけを挿げ替えるみたいな感じでだ。

開発者への冒涜だとか、そんなものは関係ない。何度も言つが俺はこだわりを大事にするのだ。

話は変わるが、俺の父さんは大企業の社長だ。桐条グループと言えばそりやいろんな事業に手を広げている事で有名だ。

大体そこらへんでも物を買ってくれば五つか六つぐらいは桐条の名が入っている事からもそれはうかがえる。親父エ。

それで今度はゲーム部門にも手を出したらしい。『ギャスバルクの復活』と言つ今時捻りも無いネーミングだが、エンパイア社との共

同開発が進められていて、先月ベータ版のテストプレイヤーの募集が始まった。

このソフトのゲーム機は満点堂から出でてこむ「エニ」で、ハード自体が発売して間もないある種の人柱要素が含まれていない訳でもない。

このゲームのマーケティングには、「細部まで本元見紛うばかりに構築された3D世界!」「自動生成されるNPCやクエストによって無限に続く冒険!」「物語はあなたが作る!」とか非常にゲームの興味を引く文句が並べ立てられてあって、俺は2回で袋叩きにされるかと心配していたのだが、予想と反して書き込まれたのはゲームを絶賛するコメントだった。

父さん……スマン。俺、あなたの事疑つてたぜ。

ところで俺もこのゲームを持つていて、別に応募に当選した訳ではない。

兄さんがゲーム開発部門の主任を務めていて、この前ふらつと現れて置いていったのだ。

一応、貰った事だしプレイしてみようとした俺は、データを弄ろうとして手を止めた。どうやら既存のゲームとは違った格納方式が使われているらしく、まずデータが開けない。

ほとほと困り果てた俺は、実家の兄さんのPCを漁った。自分のこだわりの為には妥協はしない、これが俺の忍道なのだ。

兄さんは割と仕事を持ち帰る人らしく、PCの中には『ギャスパルクの復活』の開発に使われたツールやら何やらがそのまま残っていた。……それでいいのか主任よ。

何はともあれ、まんまと目的を達成した俺はさっさと改造を始める事にした。

作業を始めると、このゲームの作り込みの深さが感じられた。まず、外装データの種類が豊富だ。何千と揃えられた3Dグラフィックはこれだけでどれだけの

時間をかけたのか、開発陣の苦労が窺い知れる。他にも多種多様な職業のデータが陳列されている様は俺の改鑄魂を燃え上がらせた。

俺は三日三晩それこそ一睡もせずにデータを弄り倒し、朦朧とした意識のまま、俺好みに改造した『ギャスパルクの復活』のROMを片手に床にぶつ倒れた。

三ヶ月後。

あれから俺式改造『ギャスバルクの復活』をプレイし続け、いい感じにキャラクターも育ってきた。

『ギャスバルクの復活』は何百という数の職業の中から一つを選択し、職業ごとに異なるスキルでもって冒険を進めていくというのが基本コンセプトだ。

戦闘方法はエンカウント方式ではなく、広大なフィールドにスポーツするモンスターをリアルタイム制で葬っていくという点が非常に俺の好みであった。

ちなみに俺の職業は堕天使、このゲーム風に言つのならダテンシだ。『ギャスバルクの復活』にはそんな職業はなかつたが俺が外装やら能力やらをツールで弄つて作り上げた。

堕天使こそ俺の正義、異論は認めない。

けつして俺が中二病患者であるとかではない。そう、断じてない。

「さて、今日も熟練度上げに勤しますかねえ」

『ギャスバルクの復活』はスキル熟練度制ではないが、俺が勝手にシステムを変更した。ティンときてやつた、反省はしていない。

このスキル熟練度制、スキルを使えば使うほど熟練度と言つ名の経

験値が溜まつていき、一定値に達するとスキルレベルが上がつてスキルの使い勝手が良くなつていくシステムだ。

俺はなにかとキャラクターが成長していくのが大好きなのだ。

他にも俺が勝手に変えたシステムは多々あるが、ここでの詳細は省く。

とにかく、俺は今日もレベル上げとスキル熟練度を稼ぐためにモンスターをひたすら狩つていた。今は春休み前ではあるが、俺の通つている学校は開校記念日と土日が重なつて三連休だ。時間はいくらでもある。

「あー、やべえ。サザエさんの時間じゃん。一旦休むか

サザエさんは社会によつて荒んだ俺の心を癒してくれる。関係ないけどタ ちゃんてエコカーのCM出てるよね?声の人。

サザエさん一家が家へと帰つたところで、テレビの入力を変え、再び『ギャスバルクの復活』をプレイし始める。

その後はコンビニに夕飯を買いに行つて、食べ終わると直ぐにテレビに向かいなおつた。大企業の息子だからつて夕飯コンビニで済ませちゃダメとかそんな事はない、断じてない。

ドワ ゴが日付が変わつたことをお知らせしたところで、テレビの電源を切つてベッドへ向かつた。

この日、俺はすんなりと眠りにつく体勢に入ることが出来た。いつもは横になつてもしばらくは眠れなかつたのだが。

不思議には思ったものの、眠りたいと言つ欲求には勝てず、俺は瞼まぶたを閉じた。

こだわりを持つて、人は初めて強くなれる（後書き）

お疲れ様です。

とりあえず原作一巻ラストまでは大方書きあがつてますので、そこまで間隔が空くことはないと思います。

知らない町に来たりとつあえず酒場に行けつて、うひのじこちゃんが言つてた

投下します。

知らない町に来たらとつあえず酒場に行けって、うひのじこちやんが言つてた。

この日、俺は背に土の感触を感じることで眠りから覚めた。辺りは木々が鬱蒼と生い茂つていて、如何ともしがたい不気味さを放っていた。

「……はい？」

思わず呟いてしまったのもしかたがないだろう。それだけ俺は混乱していた。

考えてみてほしい、寝て起きたら森の中でした、なんてあるか普通？少なくとも俺はない。

兄さんとのキャッチボールの最中に父さんの大事な壺にボールをぶち当て粉碎したときもそれはなかつた。

なんで俺だけ怒られたかとか、そういうのは気にしない。

とにかく、現状を確認してみない事には何も始まらない。落ち着きに定評のある桐条瑠依は狼狽えんのですよ！これしきの事では。自分の服装は見た事のない物に変わつてゐる。というのも、白を基調としたロングコートに所々金色の帯で十字に締めてある服で、どつかの格ゲーのキャラが着てそうな服だ。

いや正確には、現実で見た事のない、が正解だ。

俺はこの服を見たことがある テレビ画面越しに。

そうだ、この服は『ギャスバルクの復活』で俺のキャラクターが装備していたものだ。

これはあれだろ？が、ゲームの世界に訪問しちゃったとか、そういうことだろ？か。

だが俺が履いているのは寝るときに足元に置いていた家用のスリッパだ。

しばらくうとうと寝ついていたが、情報が少なすぎてまだ判断は下せない。

どちらにせよ異常な事態であることに違ひはない。

どうしようかと悩んだが、こうこうときは、まず最初に現地人を探すのがセオリーである。

そこから俺の行動は素早かつた。藤岡隊長ぱりのサバイバルスキルでもつて木々の間を抜け、あつという間に森を脱出することに成功した。

そして、俺は平野にいる。

先程の森を抜ける過程で分かつた事だが、この世界は『ギャスパークの復活』の中である可能性が高い。

森を抜ける道中、俺は危険な生物やらに出会わなかつた事で危機感が薄れていたのだが、不意に何かの気配を感じて比較的幹の大きい木に身を隠した。

『ガードアント』。軽自動車ほどの体格を持つたそれは、獲物を捕食するのに使うのだろう弓^{アーチ}をガチガチと打ち鳴らしながら、身を隠した俺のすぐ真後ろを通り過ぎて行つた。

正直、冷や汗が止まらなかつた。人間は自分より大きな生物に対し

て潜在的な恐怖を感じるという事を差し引いても、あの怪物と言つてもいい様相に俺は軽くパンツを引き起こした。

あれから、怪物と遭遇する事なくここに辿り着けたのは運が良かつた。

そして、俺は今になつてあの怪物の異常さに気が付いた。

まず、何故奴の名称が『ガードアント』だと分かつたのか。俺はあんな生物の名称なんて知らないし、そもそもあんな化け物が地球上に生息していたらダスキンは今頃ひっぱりだこだらう、効くかは知らないが。

では、何故か。

『丁寧に奴の頭上に表示されていたのだ。『ガードアント』、ヒ。いや、知らない訳ではなかつた。俺は奴と対峙したことがある……これもテレビ画面越しにではあるが。

『ギャスバルクの復活』ではゲームのスタート位置は完全にランダム式に決められる。そして、俺のゲーム開始時の位置はアルダ村といつプレイヤー拠点の近くの森だつた。

俺のキャラクターがフィールドにスポーンし、さあいぐぞ、と意気込んだところで奴にヌッ殺されたのは記憶に新しい。後にも先にも、スタートした瞬間に死亡するゲームなんてこれきりだろう。

そして、今日目が覚めた場所も思い返すとどことなく既視感があつたような気がする。

さらに、モンスターの頭上に名称とHP、MPが表示されていた。

これもこのゲームの特徴だった。

いよいよもつてここがゲームの世界であると言つ線が濃厚になつて
きた。

これから帰れるかは別にして元の世界に帰れる方法を探すか、それ
ともこの世界をエンジョイする道を進むか。

どちらにせよ、まずは情報を集めなければいけないだらつ。

「……とつあえず、町にでも行きますかねえ」

あれから長つたらしい道なき道を歩き続けた俺は、眼前に泰然とそ
びえ立つ門を見上げた。

出発した頃には昇っていた太陽も今は沈みかかっていて、今になつ
てどつと疲れが押し寄せてきた。

この門の先にあるのはメルダの町。それなりに発展しているようで、
もう夕方だというのに密寄せの声などが門の外のこぢりこじまで聞こ
えてくる。

とにかく、中に入らない事には始まらない、と俺は門の前で槍を片

手に持つた衛兵らしき人に話しかけた。

「すんません、旅の者なんすけど。町に入れてもらえます?」

「ん?ああ、構わんぞ。ちょっと待つての今門を開ける」

どうやら簡単に入れてもらえるようだ。

俺は軽く礼を言つて門を潜つた。

さて、何故俺が近くのアルダ村に行かずにわざわざ半日も歩いてこの町にきたのか。

すばり、情報収集の為だ。古来より情報と言つものは人の多い場所に集まる相場が決まつていて。

ドラクエのルーダの酒場然り、なんか教えてくれるだろ?・ヒントとか。

そういうわけで、俺は疲れた体に鞭打ちながらも酒場を探して町を歩いていた。いたのだが……この町、広い。

ゲーム画面と現実では物の尺度が違うということを今更ながらに実感した。先程からやうに20分は歩いているのだが、酒場の存在する区域には辿りつけていない。

若干辟易しつつも歩き続け、さらに20分程経つたといひで目的の場所に着いた。

この界隈はいくつもの酒場が固まつていて、どこか混沌とした様相を醸し出している。

その中でも太陽をモチーフにした看板を掲げた店を見つけ、戸を横に滑らせて店内に入った。

室内はランタンの灯りが怪しく揺れてい、匂いも酒臭い。

店内の各所には丸テーブルが設置されていて、テーブルを囲んだガラの悪そうな男たちが酒をかつ喰らいながら何事かを喫いている。

この酒場は太陽亭と言つて、ゲーム内ではプレイヤーに対してクエストを提供する施設だった。俺も序盤の金策では重宝した記憶がある。

この世界においてここがそういう施設であるかは確証が持てないが、確率は高いだろ？

俺は力ウンターへと足を進めた。

席に着くと酒場のマスターが不遜な態度でオーダーを取りに来たので、静かに「……酒」と返す。

酒場に来たらこれは外せないだろう、いわゆる様式美と言つやつだ。
……本人が酒を飲めるかどうかは関係ない。未成年だしね。

しばらくすると、店の奥へと行つていたマスターがジョッキを片手に戻ってきた。

スッと俺の手前にジョッキを置くと、一步下がつて洗つたグラスを拭き始める。

まさにテンプレといった行動に俺は興奮を隠せなかつた。そう、酒場と言つたらこれだよ！

そのまま酒に手をつけない俺を怪訝に思つたのかマスターが口髭を動かして喋つた。

「お前さん……酒は飲まねえのか？」

見かけ通りの渋い声色でマスターが言つた。

俺は迷うことなく言葉を返した。

「旅の者だ、情報を聞きたい」

そういうてカウンターに五千Gを置いた。

マスターは僅かに目を見開いたが、すぐに元の撫然とした表情に戻つた。

ゲームの中では初期の依頼報酬はおおよそ八千G、命をかける冒険者の一回の仕事量がそれほどなのだから一般人にはそれなりの金額だろう。

それはこの世界でも変わらない筈だ。

ちなみに金は町までの道中で拾つた。モラルだと教義だとそんなモンは関係ねえ。

「……して、何が聞きたい？」

ちやつかりGを懐に回収したマスターが幾分機嫌の良さそうな顔で呟いた。

別にこんな真似しなくとも世間話を装つてこの辺りの情勢を聞くだけでもよかつた。

ただ俺がこのやり取りをしてみたかっただけだ。

しかし、やつてしまつたものは仕方ない。ここは一つデカい事を聞いてみよう。

「……金になる仕事を」

知らない町に来たらどうあえず酒場に行けって、うちのじいちゃんが言ってた

さつむと主人公組に絡ませたいぜい。

RPGって大抵は世界存亡の危機に見舞われるよね（前書き）

ハイ、というわけで投下します。

未だ戦闘描写に入らないっていつ異世界の設定を潰す展開がああああああ。

RPGって大抵は世界存亡の危機に見舞われるよね

あれからマスターに依頼の情報を渡された俺は、依頼人が逗留している宿屋に向かっていた。

この辺の国の事とかを聞くだけのつもりが随分と大きな話になってしまった。

俺が情報を集めていた理由は、この世界と『ギャスパルクの復活』との差異を調べるためだ。

なぜなら、ここが異世界であるにしても、そこが画面越しに知っているものとそうでないものでは今後の活動に大きな違いが出るからだ。

つまり、万が一ここがゲームの中だった場合タイトル通りに『ギャスパルク』が復活してしまう可能性がある。

『ギャスパルクの復活』のストーリーは単純なもので、剣と魔法の世界 エターナルでプレイヤーが『大魔王ギャスパルク』の復活を止めるべく冒険する、といったものだ。

俺はストーリー 자체をそこまで進めていないため分からぬが、大魔王が復活するのだから確実に良くない事が起ころう。

テンプレ的に言えばギャスパルクが復活して世界が崩壊、すなわちゲームオーバーだ。

元の世界に帰る方法があるにしても、それがすぐに見つかるとは思えない。俺がこの世界にいるうちに『ギャスパルク』が復活したとしたら最悪だ。

そして酒場でのシステム面の事もそうだが、ここまでもくるとここが『ギャスパルクの復活』のゲームの中であると疑う余地がないようと思える。

それはタイトルの『ギャスパルクの復活』が高確率で起こるということを意味している。

となると、俺の取り得る行動は元の世界に帰る方法を探しつつ『ギャスパルクの復活』を止めるべく動く、の2つになる。

別に元の世界に帰るかどうかは決めていないが、この世界……つまりはエターナルが崩壊する事になったときに逃げ場ぐらいあった方がいいだろう。

「でも俺にそんなことできんのかねえ。自慢じゃないけど俺、一般
人よ。スペンカー先生ぐらいい役立たないよ」

ゲームの中では一騎当千のキャラクターでも中の人には大したことのない、ただの高校一年生である。
そして、その中の人が桐条瑠依きりじょうるいが凶悪なモンスターの跋扈するエターナルで何ができるのか、そもそも俺は生き残れるのか。

まあ、とりあえずは先立つものが必要だらう。件の宿屋の看板が見えてきたことで、俺は一度思考を捨て去った。

「どうやら受付には既に話が通してあつたらしく、受付は俺の姿を見ると依頼人の部屋の番号を教えてくれた。

あのマスターはアフターサービスも忘れないよつだ。

洒落た置物が展示された廊下を進む。田的の部屋は一階の廊下の最奥にあつた。

俺は扉をノックした。

「誰だい？ 食事なら今日はいらないよ」

聞こえたのは若い女の声だ。どうやら俺を従業員と間違えているらしい。

「……依頼の件についてだ」

「こういうのは雰囲気が大事だ。この瞬間だけは俺は必殺仕事人口調で通す。司会の人で。

俺が低い声で返すと数秒の後にかしやんと鍵の開く音がした。

紳士な俺は勝手に入つていいか迷つたものの、女が入室を促してきたのでゆっくりと扉を開いた。

室内は備え付けの机とベッドが置いてあるだけの簡素なものだつた。それでも、各所に置かれた小物の類は品がよく、女将おかみのセンスの良さを感じさせる。

「あんたが依頼を請けた奴かい？ ひょろつちいけど……大丈夫か

ねえ「

俺が視線を窓のほうに向けると、女がこのひびけに獰猛な笑みを返してきた。

頭上に表示されている名前は『マリー』だ。

腰に長剣を提げているところをみると冒険者なのだろうか？

「へえ、『キール』か……。“あいつ”と一文字違になんていふとここにほいるもんだね」

俺はマリーの言葉に疑問を覚えた。“あいつ”という人物に対してもない。

何故、俺のニックネームを知っている？

酒場のマスターにも名前は聞かれなかつたことから、おそらく服装の特徴を宿に連絡したのだと思っていた。

だからこそ受付は俺の姿を見て部屋へと促したのだと……。

そこまで考えて、マリーの視線が俺の頭上に向かつてゐる事に気がついた。

ん？ 頭上……？

俺は机の上に置いてあつた鏡を見て驚愕した。
んじやこりやあ！？

鏡に映つた俺の頭上には、『キール』というキャラクターネームと赤と青のラインが二本表示されていた。

そうだ、『ギャスバルクの復活』の中ならあつて当然だろ？！ な
んで気がつかなかつたんだ！

メルダの町に来ることだけに頭がいっぱい自分で自分の事に全く目が向
いていなかつた。

そしてマリーが言った『キール』と言ひ名前。俺が自分の名前をもじって作った俺のキャラクターの名前だ。

なるほど、ということは、だ。俺はエターナルにおいて桐条瑠依きりじゅりいではなく『キール』だ。

つまり、俺は自分が育てた分身の魔法や技を使える可能性が高い。

「どうしたんだい？ ボーっとしてるけど、本当に依頼を任せても大丈夫なんだろうねえ」

思考の渦に呑み込まれた俺は不意にかけられたマリーの言葉によつて現実に引き戻された。

「ああ、少し考え方をしていただけだ。仕事の説明を始めてくれ

俺は努めて平静を裝つて言つた。このマリーという女、自然体でいるにも関わらず刃やにばのような鋭さを感じる。マスターに要求した「金になる仕事」に該当する依頼だけあつて危険度は相当なものだろう。だが、俺は依頼そのものよりマリーにたいして脅威を感じた。どちらにせよ油断はしない方がいいだろう。

「今回の依頼はある人物の誘拐だよ。……と言つても誘拐自体は私の部下がもう成功させちまつてるからねえ。すぐにも依頼の紙は取り下げるつもりだつたんだよ」

やはり、高額報酬だけあって碌な内容ではない。

俺は別に酒場のやり取り自体に興味があつただけで、悪人プレイがしたい訳じゃねえつつうのに。

それに、マリーは既に依頼の件は達成されたと言った、それなのに俺をこの部屋に通したという事は別の目的があるのであつ。

「では俺をここに呼んだ理由はなんだ？悪いが俺も暇じゃない、用がないのなら帰るぞ」

虚勢ではあるが俺は冷然とした態度を崩さなかつた。

「まあ、そう慌てないで。そうだ、一つ面白い話をしてあげるよ。今回の依頼に関係はあるからねえ」「

俺の返答を待たずにマリーは語り出した。顔には依然凶悪な笑みが張りついたままだ。

「あたしが出した依頼つてのはね、このエターナルに大悪魔を復活させるための下準備のことさ。なんでもその大悪魔つてのがギャスパルクって名前でね、エターナル各地に点在する七柱の魔神の封印を解かないとならないらしいんだよ」

「実に荒唐無稽な話だな。今時子供でももつとましな話を思いつく

声色には表れなかつたが、俺の内心は戦々恐々としていた。
この女、今なんて言った？確かに『ギャスパルク』と言つていた、
復活させるとも。

「まずい。
非常にまずい。

俺が恐れていたことが現実のものとなつた。

既に『ギャスパルクの復活』へのカウントダウンが始まっていた。さらにマリーの言に部下という単語も聞こえた。となると複数人、もしくは組織的な規模で計画が進められているはずだ。

「まあ、疑うのも分かるけど全部事実さ。じゃなきゃあんな大金払うわけないだろ?」

「話を続けるよ」と、マリーは話を紡いだ。

「その封印つてのが厄介でねえ。封印を解くための呪文が必要なんだけど、呪文は守護を務める神官しか知らないんだよ。ここまで言えば分かるかい?」

マリーは口元を三日月型に歪ませて愉快そうに問いかけてきた。その姿は狂気に満ちているのに、どこか蠱惑的だった。

「……誘拐したのはその神官という事か?」

「正確には神官の娘だけね。今は部下が洞窟の最深部で封印を解く呪文を聞きたしているところさ。……ただ、その部下つてのがどうにも鈍臭くてねエ、あたしとしては不安なんだよ」

「要件を言え、お喋りに付き合つ暇はない」

俺はすぐにこの場を離れたかった。

マリーの発する狂気によつて部屋の空氣が濁つているように思えた。

「つれないねえ、まいいさ。あんたへの依頼つてのはアルダ村の近くにある魔神を封印した神殿に行つて部下の護衛をしてもらひことさ。なあに、頼り無いつて言つてもレベルは四十を超えてる、要

するに保険だよ、保険」

「……そうか、では契約完了だ。報酬はあんたからもらえばいいのか？」

「おや、驚かないんだねえ。エターナルの奴らにひとつちゃレベル四十つて言つたら英雄ぐらいのもんだろうに」

俺はマリーの言葉に強い違和感を持った。どこか違う場所からこの世界を眺めているような、そんな言い方だった。
まさか、この女！？

「エターナルと地球の人間じやあ存在そのものの大きさが違うからねえ。英雄つて言つても……あー、あんたに言つても分からぬいかない……地球から来た奴だ。
俺以外に同じ奴がいることなど考えもしなかった。

原因はやはり『ギャスバルクの復活』のゲームだろうか？　それならば、ギャスバルクの事を知つていてもおかしくはない。
さらにこの口振り、地球から来た人間を特別視したような……。

予想だが俺がエターナルにおいて『キール』であるように、こいつ等も自分の分身の力を持つている筈だ。

エターナル人にとっては驚異的なレベルであつても、ゲームをやっていた人間にとつてはキャラクターのレベルを引き継ぐわけだから何てことはない、そんな余裕から来た発言だった。
それならば辻褄ひつまも合づ。

なんにせよマリーに俺が『地球人』だと叫ぶことがばれるのは得策ではない。

幸い、俺の何も知らない事を装う演技と俺がハーフだという事もあってマリーには気付かれていないようだ。

学校で母さん譲りの金髪や日本人離れした顔つきをさんざんバカにされてきたため、俺も自分の容姿は好きではなかつたが、このときばかりは感謝した。

とにかく、ここは依頼を破棄してすぐこの町を離れるべきだ。俺はそう思つて口を開きかけたが、

「おつと話がずれちまつたねえ。報酬の金は部下に持たせてるよ、持ち逃げされたら堪らないからねえ」

マリーの言葉によつて閉口せざるを得なかつた。

クソッ、やられた！

俺の素性については気付いてないようだが、既にマリーの組織に俺が依頼を請けた事は伝わつているだろう。

情報の漏れを防ぐための策か……、おそらく依頼を受託した奴を依頼の完了と同時に一蓮托生にして組織に繋ぐ筈だ。

そして、離別しようととした場合はこいつの仲間達に消されるだろう。甘かった！ 魔神復活なんて事を企む奴らがバカなわけないのに！ こんな事ならノリなんかで依頼を請求するんじゃなかつた……、と言つてもこいつ等の情報を知つたのはここに来てからだ、どっちにしろ後の祭りだ。

俺が今打てる最善の手はこの依頼を完遂した後で、こいつ等の組織

とは軽い協力体制という状況に持ち込んで納得させることだ。

どちらにせよこのバカげた計画に参加する事にはなるが、組織への加入よりはましだう。

こいつらの目的上必ずどこかで殺人を犯す筈だ。

俺にだって人間として最低限の良心ぐらいはある。

例えゲームの中だとしても、限りなくリアルに近いこの世界で人を殺すなんてできない。

そして、ハツと氣づく。

考えてみれば地球人が全員こいつ等の仲間という事はない。
恐らく正義感に溢れた奴らは世界の悪へと対抗する筈だ。

ならば俺はエターナルの地球人に接触し、善へと引き込む。
そして、両方の勢力が均等もしくは善が優勢となつた瞬間に悪と手を切り、反撃の余地も与えずに一気に潰す。

地球に戻るにしてもエターナルに永住するとしても、こいつ等の存在は確実に俺の邪魔になる。

とにかく今は依頼の達成を目指すしかない、俺は内心で猛った感情を表に出さないように注意して言つた。

「……よし。では今度こそ契約成立だ」

「そうだねえ、ステータスウインドウを見せて欲しいところだけど……。その様子だと大丈夫そうだね、強いんだろ、あんた」

一瞬、ステータスウインドウと言われて疑問に思つたが、ここはエ

ターナルなのだ。

おそらくは『ギャスバルクの復活』で出来た事は可能な筈だ。
となればメニュー画面を開く感覚でステータスウィンドウを開ける
という事だ。

だが、俺はステータスを見せようとは思わなかつた。
将来敵対する可能性の高い人物に情報は与えたくない。

「……愚問だ」

俺はそれだけ言って部屋を後にした。

RPGって大抵は世界存亡の危機に見舞われるよね（後書き）

基本的にキール視点でのお話なので想像以上の早さで原作一巻分は
終わります。

仄暗い洞窟の底から（前書き）

とりあえず四話目投下します。

読んでる人がいるとかいないとか、そんなん関係ないっていうか俺
は自分の楽しみで（以下略

仄暗い洞窟の底から

メルダの町を出る途中で学生服を着た二人組にぶつかつたが、俺が話しかける間もなく「すまない」と言って去ってしまった。おそらく俺と同じで地球から来た奴だろう。追いかけたい衝動に駆られたが、今は依頼を優先しなければならない。

俺はそのまま町を出た。

一日中歩いていたので疲労はピークに達していたが、俺は宿屋で休息を取らなかつた。

マリーやその仲間にはなるべく良い心象を与えておきたい。
もつとも、やつらの組織と仲よしにこよしがしたいわけではない。来るべきときに備えて俺という存在への注目度を下げておくためだ。
俺だって出来ることなら善人プレイがしたいんだ！　俺は善い墮天使なんだよッ！

そのため俺は疲れた体に鞭打つてアルダ村の方角に向かっているのだ。

だからと言つて徒步で移動しているわけではない。
予想通り、と言つてはなんだが俺は問題なく『キール』の能力を使つことが出来た。

そして、俺式改造『ギャスパルクの復活』のオリジナル職業であるダテンシの使えるスキルの一つに、テレポートというものがある。別にドラゴクエストシリーズのルーラみたいに町から町へと一つ飛び、なんていう便利な魔法じゃないし、このゲーム内でダンジョン脱出効果を持つテレポートとも別物である。

ゲーム内では使用するとマークターが出現してそれを動かした場所に即時移動というなんともピーキーなスキルだった。

俺はスキル熟練度制を組み込んでしまっていたため、スキルレベルが低い頃は本当にキャラクター2、3マス分ぐらいしか移動できなかつた。

このスキルを作った俺をもってして役に立たないと言わせる代物であつたのだ。

しかし、俺の日々の熟練度上げの成果もあつて現在のテレポートのスキルレベルは八だ。

ゲームの中では対して重要なスキルではなかつたが、エターナルでは自分の半径五十メートル以内で目視しているのならどこでも瞬時に移動できるというステキ仕様へと変わつた。

連續使用を繰り返した場合、理論上はどんな生物、乗り物より速く移動できる。

だが、俺の職業であるダテンシは同じスキルの連續使用ができない。

と言うのも、本来『ギヤス・パルクの復活』では技スキルだろうが魔法スキルだろうがMPの続く限りうち放題のうえ「詠唱? 何それおいしいの?」状態なのだが、俺がMP^{マジックポイント}が切れたらスキル使用出来なくなるなんて嫌だ、でもスキル使い放題と言つのも味気ないと考えたために、各スキルにCT^{クールタイム}を設けたためだ。

このCT^{クールタイム}はオンラインゲームだと良く使われているシステムだと思う。要するに一度スキルを使つたら次の使用までに一定の時間がかかりますよ、という事だ。

そのため俺にはMPなんて概念は存在しない。注意深く見てみると、俺の頭上の青いゲージの横にはMPではなくCTと表示されている。
……やはり気無さすぎてマリーに気づかれることもなかつただろう。

そしてこのテレポート、スキルレベルハでのCTは二十秒。
つまりは何が言いたいのかと言つと　　俺は今、テレポートしては走つて、CT^{クールタイム}が回復したらテレポートしてを繰り返している。
格好がどうだとかそんなものは重要ぢやない。そう、絶対に気にしてはいけないんだ。

日はすでに沈んで、辺りは漆黒。

光源は俺の持つているランタンだけだ。

いつもなら寝ている時間がたがテレポートで移動した直後に生じる風がとても冷たく感じられて、眠気も覚めた。

そのまま移動を繰り返していると、前方に僅かな明かりが見える。
おそらく、あれがアルダ村だろう。

ゲーム初期の頃は何かと印象深かつたのでよく憶えている。当然スタート地周辺の地図もだ。

そして、目的地である封印の洞窟はアルダ村から見て北の林を抜けた先にあつたはずだ。

あの林は傾斜が激しく通常の移動手段では通り抜けることはできなかつたが、テレポート使える俺なら最短ルートで辺り着くことも可能だ。

俺はふつと息を吐くと、テレポートを発動し林の方角へと跳んで行つた。

林を抜けると、そう遠くない位置に封印の洞窟はあった。

気を抜くとメルダの町からここまでの夜中行軍による疲れがどつと押し寄せる気がした。

眠気はない。長時間に渡つて夜の冷氣を浴び続けたためだ。

俺はもうもの不調を極力気にしないようにして、洞窟の中に足を踏み入れた。

洞窟の中は等間隔に松明の土台が置かれていて、俺が近づくと中心から炎が吹き上がり、眩しそうな光が暗がりを照らした。
さすがゲームの世界だけあってまさにファンタジーだな。

照らされたことで辺りの様子が明らかになる。

内部はどうやら人間物のようで、壁画とでも称すべきものが壁一面に描かれていた。

コシコシと音をたてながらしばらく進んでいくと、不意に横の壁画が血に濡れたように朱に染まつた。

赤は生き物のように蠢き、やがて大きな一つの玉を形作る。

俺が注意して軽く腰を落とすと同時に、玉の中心から影が沸きだした。

くすんだ色の擦り切れたコートが浮かんでいるようにしか見えないが、フードの部分が赤色に光っていることと頭上に表示されたネームからモンスターだと分かる。

ヴォイドゴースト。ゲーム序盤においては低レベルなプレイヤーの敵う相手ではないが、俺のレベルは七十七だ。塵に等しいとはいえ俺にとってこれはエターナルにおいての初戦闘だ。出来る事ならムードというものを大事にしたい。

そうだ、ここまで結局テレポートしか使ってこなかつたんだ。

ここは一つド派手なスキルで蹴散らしてみよう。

テレポートが使って攻撃用のスキルが使えないことはないだろう。もしそうだったら本格的にヤヴァイ、わりと切実にゲームオーバーだ。

敬虔な俺の願いに応えてくれたのか、俺がスキル発動をイメージすると足元に光り輝く幾何学な紋様が浮かび上がった。

俺の職業であるダテンシの魔法スキルの発動待機モーションだ。

さらに背からは涅色の光を放ちながら双対の翼が現れる。

墮天使つたら羽だろ？ 黒いやつ。

片翼にしなかつたことが悔やまれる。あれさえあればセフィスの兄貴よろしくいろいろできたのに……。

しかし兄貴のようにこれで飛べるわけではない、あくまでエフェクト。

そつしている間にも壁から滲み出るよつにヴォイドゴーストは数を増やしていく。だが、問題ない。

足元の魔方陣が一際大きく輝くと、弾けるように霧散する。

「ジャッジメント！」

俺が叫ぶと、群れるヴォイドゴーストを覆い尽くすほど巨大な魔方陣が展開した。

ヴォイドゴースト達は魔方陣の発する光に一瞬動きを止めたが、数秒の後に緩慢な速度で再度こちらに向かつてこようとした。

そして、一匹のヴォイドゴーストが魔方陣の下から抜け出る瞬間上から降った光線によつて消滅した。

改めて説明する必要もないと思つが、これも俺が組み込んだスキルだ。

発動までに数秒の溜めが必要となるが、威力は絶大。それを示すように、ヴォイドゴーストは次々と降りそそいだ光に焼かれて数を減らしていった。

まあ、ぶっちゃけティーズシリーズのジャッジメントそのまんまだ。

なんで墮天使が光属性使えるの？ とか気にしちゃいけない。

俺は善い墮天使なのだ。

なんで技名を叫んだのかにもきちんと理由がある。

どうやらスキルの類たぐいはその名称を声に出さないと発動しないらしいのだ。

俺がこの洞窟にくるまでに何度も「テレポート！」と叫んだことか。決して俺が技名を言いたかつたわけではないのだ。

スキルのエフェクトが終わると既にモンスターの影はなく、地面にゴールドGが散らばつて煌めいていた。

俺はいそいそと拾い集めにかかりました。

別に鼻が尖っているわけではないが、世の中お金は大切だ。

これだけレベル差があったから楽に倒せたが、実際ヴォイドコースト討伐の適正レベルは四十レベル台だと言われている。

そしてRPGのお約束である弱い敵より強い敵の方がドロップが良い、というのはもちろんエターナルにおいても通用する。

その帰結として、俺の拾い集めた金額は一千Gに達していた。

メルダの町の宿屋での一泊が三百Gであることから、随分とまとまつた額である。

このまま少しGを稼いでいいのか。

テレポートでかなりの時間を短縮できたから、今すぐマリーの部下と合流しなくても大丈夫だろう。ジヤッジメントのCTが回復したことを確認して、俺は洞窟の奥深くへと潜っていった。

仄暗い洞窟の底から（後書き）

ハイ、お疲れ様です。

心のこもらない決意

あれから作業ゲー よろしく、ヴォイドゴーストをジャッジメントで葬りまくった俺は、今回の狩りの成果を見て顔を綻ばせた。まず、やつらは合計で二万Gもの金を俺に貢いでいった。無駄遣いをしなければしばらく金策に困ることはないだろ？

さうして、ジャッジメントを使いまくったことで、スキルレベルが一
つ上がった。

おかげで現在のスキルレベルは九、発動までの待機時間は五秒とや
や短くなり、クールタイムCTも三十秒ほどになりました。

ラッキーなのはそれだけではない。

俺がドロップ品を整理していると、その中に真っ黒な首輪を見つけ
た。

ペルネの腕輪。ヴォイドゴーストのレアドロップである。

効果は即死・石化無効という破格のものであり、攻略wikiのド
ロップ報告にヴォイドゴーストからのドロップを確認した箇の「メ
ントが書かれた事があつたが、有志達が何万という数を狩つても出
なかつたことから虚偽だと叩かれた過去を持つ品である。

かくいう俺も頭の沸いたやつが書いたのだと思つていたので、この
腕輪の情報ウインドウを開いた時は驚きのあまり声をあげてしまつ
た。

しかし正直、この腕輪が手に入ったのは運が良かつた。

この封印の洞窟に沸くのは、ヴォイドゴーストだけではない。
恐るべき即死魔法を使用するモンスター、ヴォイドバイパーが出現
するのだ。

『ギヤスパルクの復活』というゲームにおいて即死魔法の脅威度は他作品の比ではない。

プレイヤーは傭兵なびのNPCを雇つてPT^{パーティ}を組み、共に敵と戦うことが出来るがあくまで主人公はプレイヤーのキャラクターだ。つまりプレイヤーが敵の攻撃を被弾して死亡した場合は即ゲームオーバーとなり、セーブしたところからのやり直しとなる。

カプンの女神 生などのシステムに近いだろう。

そしてPTを組んだNPCが死んでしまったとき、プレイヤーはどうどうすることもできない。

このゲームには復活するためのアイテム、魔法ともに存在しないのだ。教会に仲間の棺桶を引きづつていっても無駄だ。弔う以外の選択肢はない。

プレイヤー達が即死を防ぐアイテムを求めたのも当然の帰結だろう。この腕輪以外に即死を無効にできる効果を持ったものがなかったことも、それに拍車をかけた。

だが、ここはテレビ画面越しの世界ではない。

理解はしていた事だが、リセットボタンの存在しないこの世界でHP^{ヒート}を散らしたらどうなるかと考えて身震いする。

やり直すことなどできないだろう。リセットできないのと同じで、俺には現在の記録をセーブすることなどできないのだから。

俺のいま着ている服には各種状態異常への軽い耐性効果がついているが、自らの即死を完全に防いでくれるこの腕輪とでは信頼度が違う。

可能性を減らすなどでは足りないのである。

封印の洞窟は二層に分かれていて、俺が一つ階層を降りた二層目から、ヴォイドバイパーがスローンする。

マリーの部下がいる最深部には少なくとも三層に降りなければならなかつた。

最悪、ヴォイドバイパーとの戦闘を最小限に抑えて護衛対象と合流することも考えていたがそれをせずに済みそうだ。

手に持つた腕輪はその重量以上の重みがあるように感じた。

右の手首に通すと腕輪は解けるように消えてしまい焦つたが、ステータスウインドウを開くと「腕」の欄にきちんと「ペルネの腕輪」と表示されていた。

目には見えないが右手首に触ると、人肌の感触ではない金属特有のつめたさが感じられた。

俺は大きく深呼吸すると、先の層へと続く傾斜を降りていった。

途中で後ろの方から複数の人間の叫び声とどたどたと暴れ回る音がした。

何かは分からないがさつさと合流した方がいいだろう。

俺は幾分早い足取りで歩き始めた。

突然だが俺は男だ。

なにを当然の「」を囁つてこのか疑問だらうが、まずは聞いてほしい。

男にはやらなければならぬことと、してはいけないことがあると俺は考へている。

自分の言葉は曲げないと。

死んだじこちやんの受け売りで、じこちやんがいまの政治家を見て思つたんだと。

だが、世の中うまく渡つていくためにには嘘も必要なので俺は「」の言葉を聞き流した。

じいちゃんも俺の態度を見て無駄だと悟つたのか、若干呆れたようすながらも笑つてゐた。

しかしその言葉を発するとじこちやんの顔は引き締まり、八十を過ぎ背が曲がり始めた体からは氣のよつなものが見えた。
曰はく、

「罪もないやつが痛めつけられてゐるといふを見て何も感じねえような腐つた男にはなるなよ」

じこちやんが死ぬ十日前の言葉である。

じこちやんはいつも囁つていた。

「もし力があるんならそれはおめえのもんだ、好きにすりやあいい。だけどな、おめえがこの桐条源之助の孫なら話は別だ。力のあるやつが弱え奴を助ける、そつやつて桐条は進んできたんだ。分かるか？」

呼吸器を着けられいつくたばってもおかしくない状態ではあったが、じいちゃんの言葉は紛れもなく桐条グループ前会長のものだった。

俺は日常において無報酬の働きを他人に提供するような、デキた人間ではない。

目の前でクラスメートがプリントをばら撒いてしまったとしても、そのまま素通りするような奴だ。

だが、じいちゃんの言葉はそんな俺の胸に染み込むように馴染んだ。俺の内なる心が、とかの中一的な理由か、じいちゃんの最後の言葉だからなのには分からぬ。

「おこひ、わつと呪文の詠唱を教える！　俺だって女に危害は加えたくないんだよッ！」

おやぢくマリーの部下なのだつ、頭の上にジローと表示された男が何事かを喚いていた。手元には鉄製のナイフがきらりと光る。ジローの長身でよく見えなかつたが若い女性が体を縮こまらせて震えていた。

「い、嫌ですっ！　私は風神ファーラに仕えるアローネ家の神官…」
「これは絶対に教えられません！」

レビュニアと言つた前の薄手の服を纏つた少女は、目の前の恐怖にさらされながらも瞳には確固たる意志の光が宿つていた。

ジローはその眼光に怯んだが、手のナイフを振り上げるとレビュニアに怒声を放つた。

「う、うるせー！　本当に殺されたいのかおまえっ！」

「ひいつー」

最初の強硬な姿勢も、実際にナイフを首筋にやえられると砂の城のように崩れ去った。

むしろ俺とそう変わらない筈の少女がそんな態度をとれたことを賞賛すべきだ。

レビアは顔を俯かせた。

口が微かに動いていることからなにかを喋つてはいるようだが、ここからではその内容までは聞き取れない。

やがてジローはレビアの首筋に手刀を当てて殴打せると、懐から取り出したロープで腕と足を縛り始めた。

田の前で行われている現実に、俺の頭で唐突にじいちゃんの言葉がリフレインした。

どうする、俺？

ここでもマリーとの契約を履行しなければならないのか？

正直に言つ、俺はこいつらの組織に手を貸したくはない。予想はしていた、マリー達は田標のためには弱者を虐げる^{いと}ことも厭わない。

ジローはその中ではまともな方だろう。

発言も人を傷つけることを恐れている風だつたし、言通りにレビアに力をふるつたのは氣絶させる際の一^い度だけだ。

もしかするとこいつは組織の中ではしたつぱ、あるいは俺のようこ詳しい事情を知らないまま巻き込まれたのかもしれない。

ならばジローを説得してレビアを解放させ、マリー達に対抗する

戦力に加えることができるはずだ。

交渉が難航して戦闘になつた場合、一度拘束して再度説得にのぞめば可能性も高まるだろ？。

しかし、万が一俺がその選択をした場合の危険度は現状の数段跳ね上がる。

ジローの服装は染めたようなアッシュブルンドの髪にブレザーの制服、つまりこいつは俺と同じ地球人だ。日本人特有の名前もそれを裏づけている。

と言つことは俺の予想通りマリーの仲間には高レベルである地球出身のやつらがいることになる。

俺もその一人であるためにその力はそこらのフィールドモンスターに敗走する事がないほどだ。

だが、同じく高レベルのプレイヤーキャラクターが複数で来られた場合は、まずいことになる。

同程度の力を持つた者同士の勝敗は基本的に数で決まるからだ。

だからいまはマリー達とは敵対したくはない。

自分の流儀とリスクを天秤にかける。

どうする……どちらを選べば良い！？

すると、悩む俺の視界にはジローが巨大な扉へと歩いていくのが入った。

それはとにかく巨大だった。光で構成されたように眩しく、ときおりラグがはいつたようにブレる。

そして、その巨大な扉に阻まれるよつて、偉容を誇る漆黒の骸骨が

そこにいた。

骸骨は骨で形成された口を上下に動かしていた。呪詛を呴いている
ような様相に俺はただただ寒気を感じた。

マリーの言葉を思い出す

『あたしが出した依頼つてのはね、このエターナルに大悪魔を復活させるための下準備のことさ。なんでもその大悪魔つてのがギャスパルクつて名前でね、エターナル各地に点在する七柱の魔神の封印を解かないとならないうららしいんだよ』

『正確には神官の娘だけね。今は部下が洞窟の最深部で封印を解く呪文を聞きだしているところさ。……ただ、その部下つてのがどうにも鈍臭くてねエ、あたしとしては不安なんだよ』

そうだ、ジローはあれを解き放つつもりだ。

レビュアが呴いたのも封印を解くための呪文だったのだろう。

……まづい。

直感で分かる、あれを出してはならない。

ジローは扉の前に立つと、すーっと息を吸った。

骸骨は檻から解放されるのを待ちわびるよに暴れ出した。

俺は地面を大きく蹴るとジローの元へと疾駆した。

いつももない決意（後書き）

次回、勇者サマ登場します。

もう一人の勇者 前（前書き）

ハイ、でれぬだけピュアな心でお読みください。

もう一人の勇者 前

石造りの回廊を突き進む。

スピードが出すぎているためか後続とは徐々に間が空いてきていたが、それでも速度は緩めなかつた。

「ちょ、ちょい待ちつ、ゴーゴー イシュラちゃん達が追いついてないよー」

息も荒くショウが言つた。

俺は一度足を止めて後ろを見やる。

からうじてショウはついてきていたが、村のみんなははるか後方だつた。

「ゴーゴー、ちょいペースをゆるめるべきだよ。レビュアちゃんの事が心配なのはわかる、僕ももちろん心配だ。でも僕たちが離れた隙にイシュラちゃん達がモンスターに襲われてたらひとたまりもないよ」

ショウが銀縁メガネを押し上げて言つた。

レビュー亞を助けることにばかり意識がいつていて、全員の安全を考えていなかつた。

十秒ほどでイシュラ達が追いついてきた。

みんなショウ以上に疲労しているみたいだ。高レベルの俺達ならざ知らず、ステータスの低いイシュラ達には無理があるスピードだつた。

「すまない、焦るばかりにみんなの体力を考えていなかつた」

「わ、わたしは平氣ですっ！」まほ少しでも時間が惜しいんです。

「師匠、急ぎましょっ！」

イシコラは俺の謝罪をはねのけた。

村のみんなも息は荒いものの、その顔からは「レビュー亞を助けたい」とこゝづ強い意志を感じられた。

俺は一度づつなずくと全員をぐるりと見渡してから言った。

「最深部まではもうすぐだ、急げれっ！」

俺こと^{じつくしまゆう}巖島勇^{いわじま ゆう}吾^ごは気がつくとゲームの世界に来ていた。
何が起^{おき}こつたのかは分からなかつたが、一緒にこの世界に来ていた
親友の宮本翔^{みやもと しょう}と話合^{はな}つた結果、どうやら俺たちがプレイしていた
『ギャスパルクの復活』というゲームの世界らしいことが分かつた。

いつも「ゲームの世界に入れたら」と妄想していた俺はこの事態に
興奮^{こうふん}していたが、同時に頭に不安がよぎつた。
(……どうやって日本に帰^かるのだろう？)

現実の世界には両親や姉と妹がいるのだ。何日も帰らなかつたら心

配するだろう？

ショウはただ浮かれていたが、俺はそこまで樂観的にはなれなかつた。

その後はモンスターに襲われていた村娘のイシュラを助けたことで懐かれてしまい、イシュラの住んでいるアルダ村におもむいた。代タイシュラの家系は風神ファドラの神官を務めているらしく、イシュラのとりなしもあって現在の神官でありイシュラの父でもあるオランドウさんから家に案内されて食事をごちそうになつた。

だが、俺には料理の味に舌鼓をうつてゐる暇もなかつた。
イシュラの姉のレヴィアが美人だったことで、ショウがいいところを見せようとしてモンスター退治の依頼を勝手に受けてしまつたのだ。

このままモンスターを放置しておくと村の存亡にかかるといふことで、俺も断るつもりはなかつたが……。

俺達のステータスウインドウを見てレヴィア達が口を開けて固まつたり、一晩家に泊めてもらえることになつたりといろいろあつたが、俺達の異世界での一日目はこうして過ぎていつた。

二日目、俺達はイシュラやレヴィア、それと村の青年団の方達を連れモンスターを退治しにいつた。

ブラウン管の外から見るモンスターと現実とのギャップに少々驚いたが、俺達は犠牲なしにモンスターの親玉を倒すことに成功した。見事モンスターを掃討して村に凱旋した俺達は村人たちから宴を開かれ、夜遅くまで村人たちと一緒に騒いでいた。

無礼講ということで未成年にあるまじき飲酒をしてしまい、俺は気がつくと村にあるファドラの神殿前で眠つてしまつていた。

そして、三日田に事件は起つた。

朝目覚めると、俺は神殿の祭壇前で一通の手紙を拾つた。

書いた人物はレビィアで、内容は要約すると「村を出ていく」といつたものだつた。

家出したレビィアを探すべく、俺達はレビィアの行つた可能性のあるメルダの町に急いだ。

情報収集を始めるど、どうやらレビィアを誘拐した犯人がいるらしい。く、俺とショウはその依頼を出したやつが泊まつてゐる宿屋へと向かつた。

そこにいたのはマリーといふ名前の女で、俺達と同じく『ギャスパルクの復活』をプレイしていくこっちにきたらしい。

そしてマリー達の目的は『ギャスパルクの復活』で、レビィアを誘拐したのはギャスパルクの僕じもである魔神の封印を解くためだと語つていた。

俺とショウはマリーから目的を聞くためにマリーを追い詰めたが、惜しくも逃げられてしまつた。

しかし、マリーの残していったものから、『ギャスパルクの復活』を企む人間が組織だつて動いていることを掴んだ。

俺は一抹の不安を覚えたが、まずはレビィアの安全が先だ。

俺達はメルダの町から取つて返し、一度オランドウさんに報告するためアルダ村へと戻つた。

アルダ村に戻ると、大量のモンスターが家屋を、人を襲撃していた。幽鬼のような姿のモンスターはアロー家が守護している封印の洞窟から沸いたものらしい。そしてレビィアが連れ去られた所でもある。

俺はすぐにでも洞窟に向かおうとしたが、ショウの放った言葉で足を止めた。

「その封印の洞窟を……出るんだよ、即死魔法つかうモンスターが……」

俺はそれを聞いて血の気が引いた。

昨日のモンスター退治はあくまで俺とショウのレベルが高かつたら成功したにすぎない。

こちらと敵の力量差がはっきりしていて、負ける可能性などなかつたからこそ大きくでられたんだ。

だが、即死魔法はマズイ。

ドラゴンのザキ、女神 生のムドオンがいい例だ。

どれだけHPヒットポイントがあるうど、どれだけ高いVITバイタリティを誇るうども、一定の確率でその効果が発動すれば死ぬ。それこそあっさりと。これがゲームだったなら問題はなかつた、軽く舌打ちしてセーブデータをロードすれば前回のセーブポイントからやり直せるのだから。でも、いま俺がもし、もしも死んでしまつたらどうなる？

いつまで経つてもその場を動かない俺に業を煮やしたイシュラが苛立ち交じりの声で促してきたが、俺はただ「……すまない」と返すことしかできなかつた。

結局、イシュラは青年団を連れ立つて封印の洞窟に行つてしまつた。彼らの俺を見る目には明らかな侮蔑の色が浮かんでいたが、返す言葉はついぞ見つからなかつた。

ショウはいつの間にか姿を消していた。逃げたのだとしても、俺にショウを責めることなどできはしない。

(俺だって同類なんだ、怖いんだ！)

誰もいなくなつた広場で俯いていた俺は、気がつくと神殿へと向かっていた。

そこにはオランドウさんがいた。

驚いたことに、恐怖から尻尾を巻いて逃げだした俺を見る彼の目に
は、特に負の感情はみられなかつた。

彼の聖職者然とした態度を見ていた俺は気がつくと心の内を吐きだ
していた。

親父に悩みを打ち明けているよつた、そんな気分だつた。

全てを吐きだし終えた俺は、胸の内に恐怖とは違つてじか温かいも
のがあることに気づいた。

(そうだ、いまこそ一步を踏み出すときなんだ！ 確かに俺はこの
世界ではレベル七十八の「コードスナイト」とほつもない力を持つて
る。だけどそんなものじゃない、俺に必要なものはそんな上辺だけ
のものじゃない。俺は変われる、弱い自分を脱して本当の強さを手
に入れんんだ！)

俺は神殿を後にし、村人から騎乗用の動物を借りると、封印の洞窟
へと手綱を取つた。

「なんだよ、あれ……」

ショウが震える指で前方を指差した。

石造りの回廊を走り続けること五分、俺の一歩先からは土が剥き出しになつていて壁や天井の大きさは今まで通ってきたところとは隔絶するほどに広い。

そして、その部屋の最奥に、そいつはいた。

淡く輝く白い光が幾条にも重なつて構成された扉。そして見上げるほど巨大なそれに阻まれる漆黒の骸骨。

頭蓋には角のようなものが形成されていて、胴体から生やした六本の腕が存在の異様さを強調している。

頭の上には、ヴォイドの表示。マリーが言つていた魔神つて「コイツのことか！？」

扉の向こう側は暗く、そこかこの世界ではない別の場所に繋がつているようだ。

扉はちよつと部屋と暗がりを仕切るようにそびえ立ち、ヴォイドはどうやらその境界からは出られないようだ。

それに気づいたのかショウや青年団のみんなもホッと思をついた。

「おい、レヴィアがいたぞ！」

青年団の一人が言った。

光の扉の前には三つの影がある。

一つはロープのようなもので拘束され、床に転がされているレヴィア。意識がないのか身じろぎもない。

もう一つはブレザーの制服を着て頭上にジローと表示された男。こちらもうつ伏せのまま動かない。

ブレザーってことは俺達と同じ日本人か！？ なんでこんなところ

にいるんだ？

最後のひとりはそのジローを見下ろしている。

サンゴーラードの髪は肩まで流れ、背中には黒色の翼が生えていて
妖しげな光を放っている。頭上に表示された名前は、キール。
羽つて……人間じゃなくてモンスターなのか？

あいつがレビアを誘拐したのか？ならもう一人のジローはどうし
たんだ？

「ユーホー！ きつとキールってやつが誘拐犯だよ！ 絶対そうだ
！ 黒い羽つて怪しそむんむんだし悪役のテンプレジヤン！」

ショウは慌てて部屋の中へと走り出した。

「おひー！ ショウ、ちょっと待て！」

俺の制止も聞いていない。

俺はイシコラ達にここで待機するように告げてから部屋へと入った。

「やこー、おまえ、レビアちゃんを放すんだ！」

ショウの大声でキールはどうやら慌てて振り返った。
りと振り返った。

中性的というのだろうか、キールの容姿は男とも女ともどちらのよう
なものだった。

「へ？ つーかお前ら誰よ？」

鈴を鳴らしたような声でキールは言を返した。

顔には軽薄そうな笑みが張り付き、見る者の神経を逆なでする。

(モンスターでないとすると、キールは何なのだろうか？ 翼人とかそういう種族なのか？)

「おまえがレヴィアちゃんをさらつたんだろ、そりゃうー！」

ショウが怒声交じりにまくしたてる。

(焦りすぎだ！ おまえまさかこんなときこいつに格好見せようとか思つてるんじゃないだろうな！？)

「えーと、確かに誘拐関連の依頼だつたけど俺は

「やつぱりそーカ、喰らえッ！ ファイアーボール！」

キールの言葉にはまだ続きをありそつたが、ショウの手から発射された炎弾によつて遮られた。

ショウ、おまえ何やつてんだよ！？

確かに現状では一番怪しいけどいきなり攻撃することないだろ！？

あわや直撃するかと思われた炎弾は、しかしすんでのところでキールが身を捻つて躱した。

「ちよ、ちよつと待てつてッ！ 俺は

「ええい、ちよこまかと、ファイアーボール！ もうこつちよ、ファイアーボール！」

キールがいくらか慌てた声色で何かを言おうとしたが、次々と射出される魔法に言葉が続かない。

俺はショウが魔法を発動する隙を狙つて羽交い絞めにして、ショウの動きを封じた。

「離せコーノ！ 僕は囚われのレヴィアサランを救いだしてフラグを建てるんだつー！」

「やつぱりそんなことかっ！ 時と場合を考えろつ！ そして相手をよく見りつ！ 明らかに何か話しかけてきてた つて危ないつー！」

俺はシヨウを押し倒す形で横に飛び退いた。

俺達が立っていた位置は何かに溶かされたように抉れていた、キルが魔法を使つたみたいだ。

キールの額には青筋が浮かんでいて、口元はピクピクひくついている。

(そりや怒るよなあ…… いきなり火達磨にされかけたんだから) とりあえず話を聞いて貰つために、俺はキールに声をかけた。

「待つてくれ！ 俺達はレヴィアを助けに来ただけだ。君がレヴィアを誘拐したのでなければ危害は加えないし、謝罪もする。それで、君がレヴィアをさらつたのか？」

俺が一息に告げると、キールからは毒氣を抜かれたように怒氣が治まった。

……シヨウの方をずっと睨んでいたが。

キールは胸に手を当てすーっと深呼吸をすると、俺に視線を合わせて言った。

「まずお前らに俺からいくつか確認したい。お前らはその服装からして日本人、そもそもって『ギヤスバルクの復活』で遊んでいるうちに気がついたらこっちに来ていた、合ってる？」

「ああ、俺とショウは『ギャスパルクの復活』をプレイしているうちこの世界に来てしまったんだ。……もしかして君もなのかな？」

「そそ。俺の場合は目を開けたら森の中だったんだよ」

だが、キールの容姿はどうも日本人離れしている。その前に背中に羽が生えた人間なんていない。

俺とショウの訝しげな視線に気付いたキールは、艶のある金髪を一房掴むと少しの疲れが混じつたような表情で言った。

「ああ、俺ってこんななりだけど正真正銘日本人よ？」母さんがアメリカ生まれでさ。あと背中にくつついてんのは俺の職業特有のエフェクトね」

そう言ってキールは目を閉じた。すると背中の羽が毒々しい瘴気を放つエフェクトとともにガラスが砕けたように四散した。目をあけたキールは先程の軽薄な表情とは一転、いくらか真剣な顔になり、「そんでさ」と続けた。

「お前らはギャスパルクを復活させようとしているやつらのことって知ってる？　こっちにきてからさー、俺はまず情報を集めるためにメルダの町の酒場に向かつたんだよねえ。そこでこの世界が『ギャスパルクの復活』なんじゃないかって確証を得た俺は、当面の宿代を稼ぐためにクエストを請けることにしたんだ。そんでさ、そのクエストの依頼人がマリーって女で話聞いたなら、なんか知りないけどギャスパルクを復活させる的なことを言つてたわけよ。当然俺は話を無かつたことにしようと思ったんだけど　やられたわ。あいつ、俺のキャラクターネームを既に仲間に知らせたっぽいんだよ。そりゃ魔王の復活企んでる連中が仕事を請けたやつを逃がすわけな

いわな。俺の仕事の内容は、そこに倒れてるレビュアを誘拐したマリーの部下の護衛でさ、状況的に請けざるを得なくなつた俺はそいつがいるつていう場所、つまりこの洞窟に向かつたんだ。ここまではOK?」

「ああ、というより俺達も失踪したレビュアの搜索にメルダの町に行つて、そのマリーって名前の女には会つたんだ。キールが言つていた内容を俺達にも話してくれたよ」

「へー、こりゃ偶然。そんじゃお前らがマリー達についてある程度知つてる前提で話すよ。話を戻すけど、依頼を請けた俺はこの洞窟を進んでたんだ。途中までは俺もやつらの犯罪の片棒を担ぐつもりだつたんだけど、やっぱり気が変わつてさー。俺に悪人プレイは似合わねえつての」

「それじゃあキールは

「俺がこの部屋に着いたとき、マリーの部下がレビュアを脅して聞き出した魔神復活の呪文を唱えようとしてたもんで、軽くボコらせてもらつたよ」

「……ショウ」

「え、えーと　「」「メンナサイ！」

ショウの謝罪を受けたキールは軽く何でもないとでも言つた風にうどけて見せ、頭を上げさせた。

しかし、レビューを誘拐したのがキールでないとすると、いったい誰なんだ。

「それで、そのマコーの部下とこうのは一体どうしているんだ？」

「それならそこで伸びてるジローってやつが アレ？」

床に倒れていたもう一人の男の姿が見えない！

俺が光の扉へと視線を移すと、ヴォイドの巨躯の下で高らかに呪文を唱えるジローがいた。

「時は今！ 靂を開け、疾く開け！ 風神ファアドラの名の下！」

瞬間。ヴォイドを封じていた光の扉が揺れた。

扉を構成する光の束が発する光量がしだいに弱まり、決壊したようにはじけ飛んだ後、宙に溶けるように霧散した。

遮るものが無くなつた魔神は歡喜の声を上げ、それは轟音となつて室内に反響した。

ヴォイドはちらにその紅い眼光を向けると、暗がりから抜け出し悠然とした動作で歩き出した。

「ええっと…コレ、ヤバくね？ 割とマジで」

キールのキーの高い声がどこか遠いものに聞こえた。

もう一人の勇者 前（後書き）

とこりわけで、ユーロ君達の行動をダイジェストでお送りしました。
基本的に僕の小説内のショウ君と原作のものでは、映画版ジャイ〇
ンとテレビ版ぐらいの違いが発生します。

もう一人の勇者 後（前書き）

ハイ、更新です。

もう一人の勇者 後

「あれ、ちょ 待て待てっ！ 僕はお前を助けてやつたんだぞ！ 分かるか？ 分かるよな！？」 僕は

必死の形相で口走るジローの言葉は、ヴォイドの指先から走った赤光によつて遮られた。

ジローの生命を表すHPバーヒツバが削れ、一瞬で真っ白になつた。音をたててジローが崩れ落ちる。

「やばい、やばいよコーゴー あいつこいつを見てるよー ど、ど うみじめ……」

ショウが上ずつた声で言った。
ヴォイドは緩慢ではあるが、しかし確実に俺達の方へと向かつてくれる。

「どうしようも何も倒すしかねえつーのー じゃなきや魔王復活の前に俺達がゲームオーバーだ！ 全員で一斉に攻撃すんぞー！」

「分かつた、せーの、でいくぞー！ セーのー！」

俺が合図を出したことを皮切りに、俺の剣から衝撃波がヴォイドに走る。

ショウが放つた魔法はヴォイドの周囲に雷雲となつて出現し、俺の放つた衝撃波がヒットすると同時に、雲を突き破つて幾条もの雷撃があたりに轟音を撒き散らしながらヴォイドの頭部へと殺到した。

「ジャッジメントツー！」

雷が止むと、今度は部屋の天井一面に不可思議な紋様が浮き上がる。おそらくキールの魔法だろう。紋様は絶えず変化し続け、一度大きく光り輝くと、一筋の光線が降った。

見事ヴォイドの脳天に直撃したそれは、絶えることなく天井の魔方陣から降り注ぎ、地面を深く抉りながら、ヴォイドへ当たり続ける。土埃が舞つて、それにヴォイドの姿が隠れる。

「……やつた？ もしかして倒したの？ 僕たち」

「ちよ、お前それはフラグだつつのー。」

視界が良好となる。

しかし、倒せたのか、という希望は、ヒットポイントヴォイドのHPゲージの示す現実によつて打ち砕かれた。

「ウソだろ……、全く減つていない」

俺の口から思考が零れ落ちた。

ヴォイドのHPはあれだけの攻撃を浴びせたにもかかわらず、数値にして二十分の一、表示に直すと僅か数ドットが削れただけだった。

俺達が軽く放心している間、ヴォイドは待つてくれることなどなかつた。

落ち窪んだ、本来眼球がある部分が怪しく光り、六本あるヴォイドの腕が赤く発光する。

ヴォイドは奇声を上げながら腕を天高く振り上げると俺達田掛けて振り下ろした。

俺が反応できたのは奇跡に近いだろ？

呆然としていたショウとキールの体を引っ掴み、顔から突っ込むようにして後ろへと跳んだ。

刹那。重機でビルを丸ごと押しつぶしたような破碎音がした。巨大な拳骨が軽く人を吹き飛ばすほどの風圧を発生させる。

ヴォイドの腕は一秒前まで俺達のいた位置に深く突き刺さっていた。距離にしてほんの一メートルほどの近さに。

俺達は命が助かつたことに胸を撫で下ろしたが、これで身に降りかかる脅威が去ったわけではない。

ヴォイドは地中深く埋まつた腕を力任せに引き抜くと、地に倒れた俺達を見下ろした。

骨で構成された顔からは感情など読み取れるはずもないが、そこにはどこか愉悦の影が見えた気がした。

「『Jのままじや まづい……、どうにかここを抜けださないと』

「つっても、コイツのリーチの長さは半端じゃない。攻撃モーションの隙に逃げたとしても部屋の入口に着く前に後ろからドンッてことになつちまう」

「ええっ！　じゃあどうするのさ！？　こんな化け物僕たちだけじゃ倒せないよ！」

「一つだけ方法がないってわけでもない。『Jの中で一人が骨野郎の注意を引きつける間に残りの一人がさっさと逃げる、通称『すいつませーん、もうあなた様には逆らわないんで、一人のメガネで許してください』作戦だ』

「それって僕のことじゅん！？ やつぱつせつめの！」と根に持つて
るよね！？ ねえ！？」

「半分おふざけとは言え、他に作戦がない以上いまのところはこれ
が一番有力だぞ。さつさと別案を出さないことにほつー… やべ
え、次くんぞ！」

キールが警告を発した。

ヴォイドは腕を振り上げ、攻撃態勢に入っていた。

（ぐそー… どうする、何か、何か状況を開く案を………）

「ゴーゴさんっ！ 魔神を、ヴォイドを向ひの側に追い出してくだ
さいっ！ 私が封印の呪文をかけます…」

倒れて気を失っていた筈のレヴィアが立ち上がり叫んだ。
服が所々擦り切れ、HPゲージが数ドット削れているのを見ると、
先程の風圧でダメージを受けたのか。

「本當か！？ よし何とかコイツを押し出すぞ！ ショウ！ キー
ル！ 魔法を使ってヴォイドの動きを止めてくれ！」

「了解！」

「あいよー、なんか知んないけどお前に任すぞ、ゴーゴー！」

ショウとキールの手から放たれた火球と光線がヴォイドの体勢を崩
させた。

振り上げていた腕の反動で大きく後ろへと仰け反る。

俺が使う技はただ一つ。

俺の職業、軍神ゴーデスの祝福を受けたゴーデスナイトの全職業中最強の単体攻撃スキル。使用者の最大HPとMPの半分を対価に敵に深手を打てる奥義。

「ゴーデスエンブレム！」

重心が後ろへと移ったヴォイドの腹目掛けて、剣を振り下ろした。剣筋を辿るように白い光が発生し、巨大な光の剣が生成される。矢の如き速さで射出された巨劍は、ヴォイドに避ける隙すら無く、その胸へと突き刺さる。

不安定な姿勢で光剣の一撃を受けた魔神は、骨の足では自らの重量を支え切ることができず、部屋の向こう側に広がる暗がりへと倒れるように押し返された。

「今だ、レビアアッ！」

「すべてを疾く知る風の神！ 智を力と成す風の神！ 敦智をもてて魔を封じ、権能をもちて邪を縛らん！」

レビアの凛とした声が呪文を紡ぐ。

声の響きに合わせて空間から染み出るよつに粒子が沸きでて、こちらとあちらを塞ぐよつに壁を形成する。

光の壁の隙間から覗くヴォイドはその長い腕でようやく起き上がる。と、自らを阻む境界をその紅い眼光でしばし見据えると、やがて暗がりの奥へと戻つていった。

「もしかして……俺達、助かつたのか？」

「うん、そうみたい。もう二つには来れないでしょ」

「ふいー、危ねえ。今度こそゲームオーバーかと思ったね、俺は」
俺を先頭に、全員で一様に安堵の言葉を発する。

「ユーゴさんつ！」

「師匠ーっ！」

脅威から逃れられた安心からか、俺の胸に飛び込んできたレビュー亞の感触も、ずっと入口で震えていたイシュラがこちらに駆けながら俺を呼ぶ声もどこか遠いものに感じた。

もう一人の勇者 後（後書き）

これでユーロ君視点はおしまいです。

貝塚自身が複数のキャラの性格や口調を小説に反映できないという点が主な理由です、ハイ。

【「うして俺は旅のお供を見つけたわけです】

見事、ヴォイド大先輩を撃退した俺達は、いまアルダ村にあるイシユラ、レビィア姉妹の家の前にいる。

「お~い、いつまでそこに突っ立つてるつもりだよ、いうこうのは時間が経てば経つほど行き辛くなるんだっての」

「お、おいキール、押すなつて。むちゅよい、あとちよいで決心がつくからー。」

そして誘拐犯ことジローが家の中に入るのをしぶつていて、俺がそれを急かしているという構図がある。

何故こんなことになつているのか、これを説明するにはそう、ヴォイド撃退の直後まで遡る必要がある。

「本当に済まない……じゃあ、俺はもう行くよ

ヴォイドを撃退した俺達は、この誘拐の実行犯であるジローから話を聞いていた。

死んだと思っていたジローだが、実は少し、本当に一REDIT一分ではあるがHPゲージに赤ラインが残っていたのだ。

意識が戻ったジローは涙とともに今までの謝罪をしてきた。
どうやらジローも『ギャスバルクの復活』プレイしているうちにこの世界に来てしまつたらしく、知り合いもおらず心細くなつたところマリーから『地球に帰る方法がある』と聞かされたそつだ。

悪い事とは知りつつも元の世界に帰りたいという願望に心が負けてしまい、依頼を請けたらその方法を教えるというマリーの言を信じてメルダの町にいたレビィアを誘拐してしまつたとジローは語る。

「ちよい待ち、どこに行くのよ？」

俺はジローを引き留めた。

「えつ？」

「迷惑かけたんつしょ？ なら親御さんに頭下げなきゃ、そんでもつてー、三発ぶん殴られてー」や

迷惑をかけたのなら謝る。これは当たり前だ。

もちろんジローを引き留めた理由はこれだけじゃない。

おそれらくマリーはジローの情報を仲間に伝えているだらう。「いや、それはほぼ間違いない。

ならばジローが単独で行動した場合、マリーの仲間（ジローの話だとマリーが教団と言つていたらしい）に見つかって高確率で消される筈だ。

俺はジローの無事を思つてないわけではないが、どちらにせよ魔神が復活しなかつたことは近いうちにマリーや教団の耳に入る。となれば、任務に失敗したジローはもちろんのこと、俺も教団から狙われるだらう。

どこかから情報が漏れた場合はコードやショウも同じく手をつけられる。

「うなれば俺はとにかく教団とは敵対しなければならない。そのためには仲間が必要だ、それも高レベルの者が。

教団に高レベルのプレイヤー達がいるのなら、俺達も数を揃えて対抗する。

これから俺はその仲間集めに各地を回らなければならない。なら個人で動くよりも一人以上でいた方が安全だ。

「で、でも俺は

「いいからつべこべ言わずにここにやつて」

「痛つ、あー、すゞい腫れてる……」

結局ジローがレヴィアのお父さんへ謝罪するまでに村の青年団による厚い歓迎があつたため、いまのジローの顔はアンパンマンのように腫れあがっている。

見ていて「オラッ、新しい顔つけてやんよつー」とか言つてバーボールをぶつけたくなるのは俺だけじゃない筈だ。

「くへへ、こんなに殴られたのって親父とケンカしたとき以来だな」

傷は増えたが、ジローの顔は憑き物が落ちたように晴れやかだ。（中途半端に慰められるより、いつそ殴られた方が前に進めるタイプだな、コイツは）

「ありがとな、キール。俺、お前が引き留めてくれなかつたら今回のことですつとうだうだ悩んでたと思つ。うん、きっとそうだつた別に俺が何か中二臭いこと言つたわけじゃないの。」

なんだわつ。

こう、面と向かつて礼とか言われたことなんてなかつたからなんか、なんかすごい恥ずかしい。

「本当にありがと、キール」

(やめろっ！ 僕にそんなキラキラした眼差しを向けるんじゃないねえ

！ あと僕はお前のメンタル面まで考えてたわけじゃないんだよ！

とりあえずコッチに引き込んだじゅう、とかそんな感じだったんだ

！ 僕をこれ以上居た堪れない気持ちにさせるんじゃないよっ！）

「それでさ、キールがさつき言つてたことなんだけど。教団と戦うための仲間を探す旅、それ俺にも参加させてくれないか？ いや、黙黙だつて言われてもついていくぞ！ 僕、ちゃんとした形でアルダ村の方達に罪滅ぼししたいんだ、教団はアルダ村の人達にとつても危険だろ？ だつたら教団と戦うために俺も協力したい。……どうかな？」

俺は大企業のボンボンといふことで、当然友達付き合つてもそれに見合つたやつらとだつた。

だけどそいつらはやつぱり俺のことをどつかで桐条グループの桐条瑠依きじょうるいとしか見ていないくて、結局プライベートまで仲良くなつたやつなんていなかつた。

だからだろうか。

この世界じゃサザエさんも見れないしネットだつてできない、でもここで俺は桐条瑠依きじょうるいなくてキールだ。

現にジローは俺のことを桐条グループとは別のところで見ていて、そんな俺に「ありがとう」って……。

「お前が言わなくとも俺は引きずつてでも付いてさせたつての。てーかそのキラッキラした顔ヤメロ！ なんできれいなジャインみたいになつてんだよ！ 言つとくけどお前の罪は一生レヴィアさんの心の中に残るからな、コレを忘れるなよ！」

「お前なんで人の傷口を抉るようなこと言つただよー？ 僕いま『

「これからがんばろう』みたいな感じだったじゃん！　TOAでいう
断髪イベント並みに邪魔しちゃいけないとこまだらー？　いま！？」

ジローが何か言っていたが俺はとりあえず今晚の宿であるレビューアの家に行くことにした。

この日、俺は日本にいたよりも寝つきが良かつた気がする。そういえばほとんじ丸一日寝ていなかつたことを思い出したが、それとは別の理由であるような気がした。

「それじゃあキールとジローは別行動なの？」

「そーじつこと。俺とジローはあちこちまわって教団に対抗する仲間を探して来る。ゴーヴとショウは昨晩話したように王都に行くんだろ？　もしそちらで日本人に会つたらできるだけ協力を取り付けるようにしてくれ」

「ああ、分かってる。そつちも仲間探しがんばってくれ。ただし、マリーのような教団の人間には気を付けてくれ。名前と服装だけだと判断出来ない可能性がある」

「俺が昨日魔神の解放に失敗したことは既にマリーあたりから教団に伝わっていると思う。マリーと接触した以上、ゴーヴとショウの

名前も同時に知られたと考えてい。そつちも油断するなよ

俺とジローはアルダ村の入り口にいる。

時刻は早朝。

まだ日すら見えておらず、そらはうす暗い。

わざわざ村人を起こす必要がないと思った俺達は、コーポ達にだけ出発することを告げたのだ。

そしていまは、昨晩四人で話し合つたことの確認をしていたところだ。

昨晩の会合で分かつた情報を整理しよう。

まず、俺はこの世界が『ギャスバルクの復活』の中という認識だったのだが、どうやらその考え方が違う可能性が出てきた。

考えてみれば当然のことなのだが、ゲームの外からでは食べ物の味など分かる筈がないし、当然その匂いなんかもそうだ。

ZPCと思つて接してきた村人達の行動もプログラムに組まれているとは思えないほど緻密で感情的だ。

そして、いま俺達はそれらをしっかりと感じることが出来る。

……まあ、これだけでは確証足りないので、一旦保留といつ」とになつた。

次はゲームの世界との世界の具体的な差異についてだ。

この情報は俺とショウが封印の洞窟になかつた筈の部屋ができていたことから気付いたことだ。

魔神ヴォイドが封印されていた部屋は、ゲーム中ビームにもなかつたものだ。

これがゲーム開発者の故意なのかは定かではないが、俺はどこか作成的なものを感じた。

そして今のままでも考えもしなかつたのだが、『ギャスパルクの復活』をプレイしているうちにこの世界に辿り着いた、これに開発者が関与していないことなどあるのだろうか。

もしかすると今回の事件に父さんや兄さんが関わっているのかもしない。

俺はこのことをゴーパやショウ、ジローにも話さなかつた。まだ確定などしていないことと、身内が犯人なのかも知れないという負担のどちらからなのかは分からないが。

考へてゐるうちに頭の中がぐるぐると複雑になつてしまつたので、俺は一度思考を放棄した。

「そんじや、俺達はそろそろ行くから。まだどこかで会つたときには情報を交換しよつ」

「またな、ゴーパ。ショウ。あと、君達からもう一度reviyaさんに伝えてくれないか』俺は自分の罪を忘れません、罪滅ぼしになるとは思つていませんが、教団という悪に立ち向かうことでアルダ村の皆さんの平穏を守りたいと思つています』……ちょっとクサイ気もするけど、これでいいか」

「ああ、確かに伝えておく。一人とも道中気を付けてな

「うん、reviyaちゃんもそんなに怒つてはいないみたいだつたよ。びつちかつていうと青年団のジャッキーとかティギーとかが……言つて怖くなつてきた」

俺とジローはゴーパ達の見送りを後にアルダ村を出発した。

目的地はここからさらに東、砂漠を越えた先にある商業都市ハンブルク。

早朝の冷たい空気が肺に浸透して体中に清涼感が溢れる。

俺達は打倒教団というデカい目標を掲げた旅を始めた。

「ついで俺は旅のお供を見つけたわけです（後書き）

ハイ、お疲れ様でした。

これで原作一巻までのお話は終了となります。
予想以上に早かつたと思つ方もいらっしゃるのではないでしょうか?
貝塚は物語上必要となる場面以外では他キャラへの視点移動はほとんどしません。

そのため、視点変更しない場合はこのような感じになります。
もし、他キャラ視点での話をもっと読みたい、といつ場合は「一報
下さい。

明言はしませんが、極力そういう風に努力したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2838z/>

RPG W(・・)RLD ぼくのステキなDA 天使サマ

2011年12月13日19時55分発行